

歴史散歩

れきしさんぽ° No3

ちくごこくぶんじあと
筑後国分寺跡



筑後国分寺跡の所在する国分町日吉神社境内

◆国分寺跡の現況

筑後国分寺跡は、西鉄久留米駅から南東約2.5kmの国分町にある。明治30年(1897)に歩兵第48連隊が設置され、敗戦までその門前町として栄えた。戦後もなお商店街を中心に周辺には住宅が密集し、スーパーなどの大型店舗などもあり、活気にあふれた地域である。その中に国分町の鎮守である日吉神社が所在している。この日吉神社は、古く国分寺の跡として『寛延記』寛延二年(1749)に記され、伝承される所である。境内には、古瓦や礎石に使用されたと思われる巨石が散在し、その痕跡を物語っている。

◆国分寺の建立

国分寺の建立は、天平十三年(741)聖武天皇により詔が発せられたことで始まる。しかし、実際には詔が出されるまでに多くの経緯があり、また詔が出されたのちも全国同時建立が始まり、同時に終了したものである。

筑後国分寺においても、種々の事情が存在したものと思われ、文献に登場するのは、『続日本紀』の天平勝宝八年(756)の項に25国とともに記載され、その後の記載は見られず、このときに仏事荘嚴具の下賜があったのである。したがってこのころまでに筑後国分寺には、主要な建物が建立されていたことが想像される。

◆国分寺の建物(堂宇)

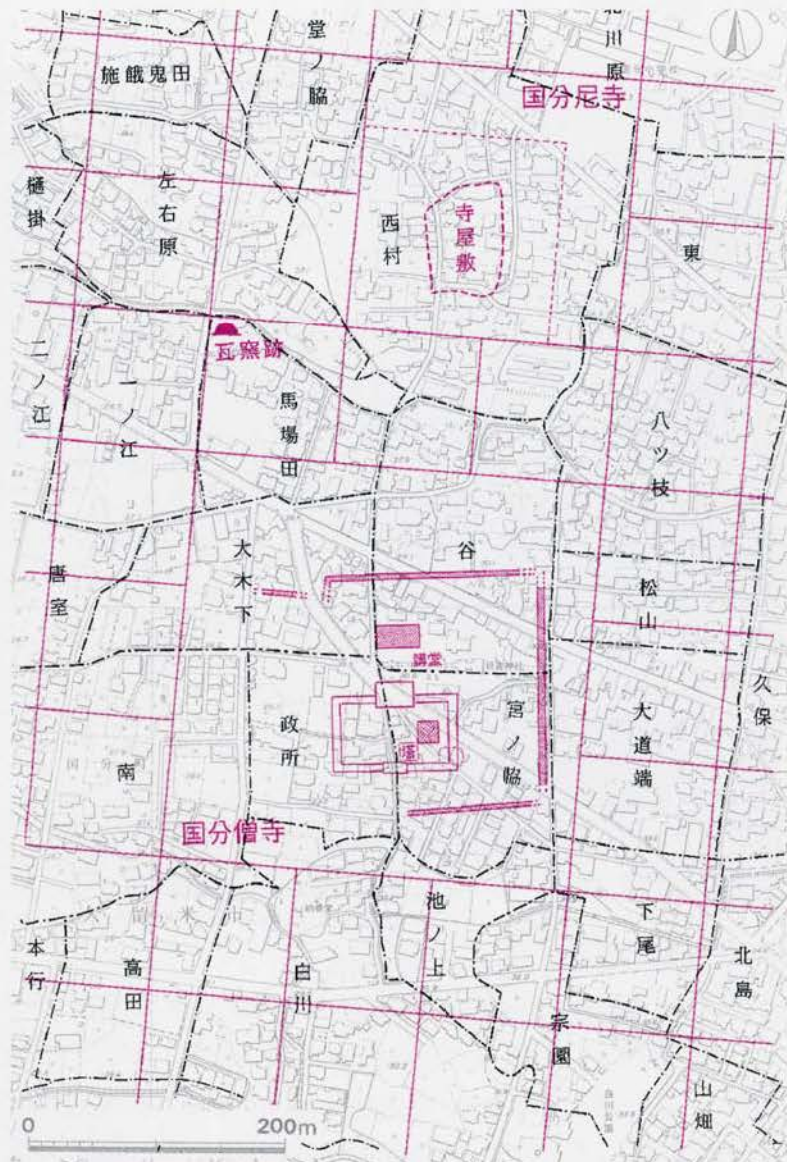
寺院を構成する主要な建物は、宗教活動に欠かせない塔・金堂・講堂・鐘楼・経蔵、それに付帯する中門・回廊・南大門等である。さらに宗教活動を行う僧侶の生活に関係のある僧房(尼房)・食堂・事務所・厨等で構成されている。

◆筑後国分寺跡の発掘調査

筑後国分寺の発掘調査は、昭和27年(1952)に福岡学芸大学(現福岡教育大学)により、日吉神社境内を調査したのが最初である。その後昭和43年(1968)に福岡県教育委員会により、同52年(1977)以降市教育委員会によって継続的に実施するようになり、平成8年度で40ヶ所を数える発掘調査を行ってきた。しかし、そのほとんどが僧寺跡に集中し、尼寺跡の実態は皆無である。

発掘調査の結果、講堂跡・塔跡・築地跡(北面・東面・南面)を確認することができた。

講堂跡 日吉神社境内西側に自然面を加工し、径約65cmの柱座に南北方位の溝を彫り込んだ礎石が遺存する。さらにこの礎石の周囲から礎石抜き跡が検出された。これら礎石や礎石抜き跡から建物の規模を推定すると、身舎部分は桁行5間(約22.5m)、梁行2間(約6.6m)を推測でき、さらに周囲に約3.3mの底部分が付設され、桁行7間(約29m)、梁行4間(約13m)を計る荘嚴な建物が



筑後国分寺の寺域と建物配置推定図

復元できる。

塔跡 日吉神社から道路を隔てた南側に位置し、周囲より一段高くなっている。礎石の遺存はなく、礎石抜き跡5ヶ所を検出した。礎石抜き跡の配置より、心礎・北東四天柱・東側柱であることが確認できた。これら礎石抜き跡より建物規模を推定すると、中央間約3.6m、脇間約2.7mを測る3間四方の建物が推定できる。したがって一辺約9m規模の塔を復元できる。

築地跡 北・東・南面を確認するが、いずれも部分的な調査により確認したものである。検出された遺構は、後世の削平により並行する溝のみで構造については不明である。それぞれを復元すると、北面と南面は平行関係がなく、また東面ともいずれも直角にない。さらに確認できてない西面を地形から推定すると、僧寺寺域は正方形でなく不整四角形をなすことになる。

◆伽藍配置（僧寺）

寺院を構成する主な建物は、前述のとおりである。これらの建物の配置については、諸国の国分寺において種々の形式で配置されている。しかし基本的な配置としては、総国分僧寺である東大寺の伽藍配置がその元になっていると思われる。

筑後国分僧寺は、確認された講堂と塔ならびに築地を手がかりに推定する。講堂の前面に塔を検出するが、講堂の主軸延長線より東に位置し、その距離は約85mを測る。金堂の所在については、発掘調査によるところはないが、古くは講堂の前面および塔の北西に「塚」の所在が伝えられ、これをもって金堂の基壇と推定したい。講堂・金堂さらに金堂の南東前面には塔が想定される。その他の建物については、東大寺の建物配置に比較すると、推定主軸線上に講堂・金堂・中門・南大門が並び、金堂より中門まで塔を囲んで回廊が設置されたと推定できる。これらの主要な建物の外側を築地が囲んでいる第 図に示すような配置が考えられる。筑前国分寺と同様な配置を示し、同一設計図によるものであろう。



日吉神社に残る講堂跡の礎石



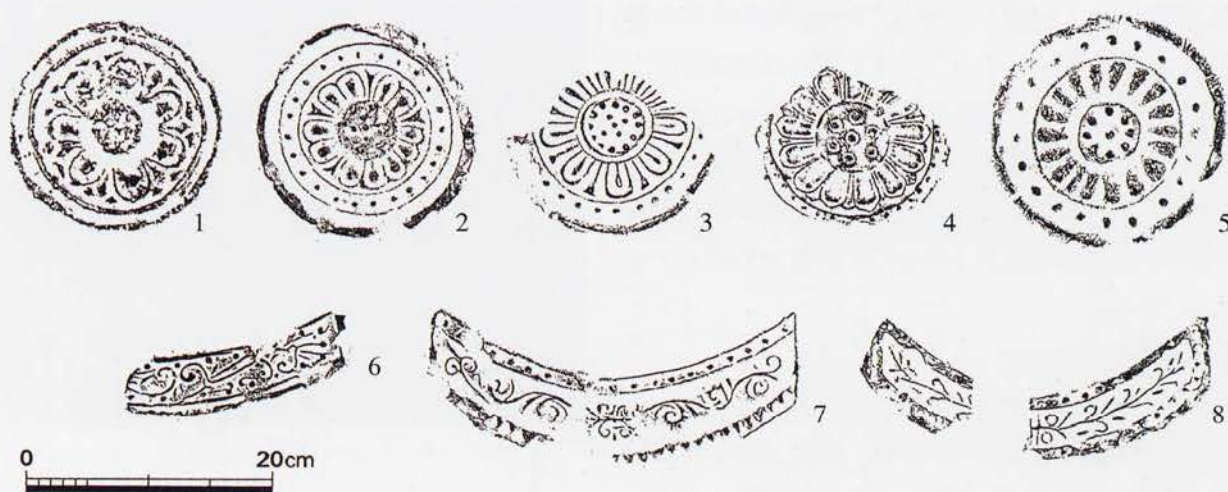
塔跡



北面築地跡の雨落溝遺構

◆国分寺の古瓦

国分寺一帯は、古くから古瓦の散布は知るところであった。発掘調査により発見された瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・鬘斗瓦などである。軒丸瓦は、瓦当面に蓮の花を図案化した蓮華文が表現しており、古代寺院や官衙に使用された瓦の主流を占めている。中央に突出した円形の中房をおき、周囲に花卉を配している。花卉は大きく単弁と複弁の2種類があり、また中房上には蓮子が数個整然と並べられている。図に示す1は井上廃寺（小郡市）出土瓦と、4は大宰府政庁出土瓦と同様と考えられるが、他の文様については、筑後国独自のものと思われる。軒平瓦は、瓦当に唐草文を施し、文様には中心から左右にのびる均整唐草文と、一方の端より他方の端にのびる偏行唐草文の2種類が主流を占める。図に示す瓦は、筑後国独自の文様であり、他に類例は認められない。



語句の解説

礎石：柱の台石。自然石を使用したものと、それを加工したものがある。加工したものには柱座、ほぞ、地覆座などを造りだしたものもある。

身舎：建物の中心部であり、これに庇の間をつける。

心礎：塔の中心柱の礎石。

伽藍：寺院の建物群のことであり、僧侶などが修行をする場所。

官衙：中央並びに地方の役所のことで、中国風の呼び方であり、古代日本では曹司と言われていた。

文献資料

武藤直治「筑後国分寺址」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第3輯、「筑後国分寺跡」各集久留米市文化財調査報告書、「筑後」角田文衛編『新修国分寺の研究』第5巻下 西海道 吉川弘文館、「久留米市史」第1巻、「久留米市史」第12巻 考古資料編



発行機関名 久留米市教育委員会
〒830 久留米市城南町15-3
文化財保護課 0942(30)9225
久留米市埋蔵文化財センター 0942(34)4995
文化財収蔵館 0942(38)6194